

報告

保育者養成におけるリズム感を養う指導法について

山路 麻佳

＜要 旨＞

本稿では、保育者を目指す学生のリズム感を養うための指導法の検討を行った。

保育者には子どもの音楽表現活動を支えるためにピアノ演奏や歌唱などの技能が求められるが、ピアノ演奏の経験がない学生など演奏の基礎となる音楽的知識の不足により、読譜に時間を要し技能の習得が遅れている現状にある。そのため、読譜力の向上を目的に独自の教材を作成し、Step.6までを段階的に構成し、各ステップの内容を細分化して音楽的要素を習得できるようにした。これにより苦手とする要素やレベルに合わせて取り組むことが可能となり、効率良く読譜力を向上することができる。また、リズム感の発達を促すことができるようボディパーカッションの活動を行う。音程のないリズムを中心とした活動は、音楽に苦手意識のある学生にも楽しんで活動することが可能となる。リズムを介した他者とのコミュニケーションは、豊かな感性や表現することの楽しさを育むだけでなく、協調性や責任感など様々な力を養うことにも繋がると考えられる。

キーワード：リズム、ソルフェージュ、ボディパーカッション、音楽表現、保育者養成

I. はじめに

「幼稚園教育要領」¹⁾、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」¹⁾と記されている。子どもの音楽表現活動は合奏や合唱といった演奏を重視した活動ではなく、園生活の中で遊びを通して展開していくものである。子どもは園生活の中で様々な音や音楽に触れることで感性を育み、音楽に合わせて身体を動かしたり、リズムをつくったり、即興的に歌っていくなど、自分なりのイメージを表現することの楽しさを味わうことで音楽に親しんでいく。保育者は子どもの表現を受け止めながら活動を展開していき、子どもが音楽表現を楽しめるような環境をつくっていくことが大切である。そのためには、保育者自身が豊かな感性によって表現することの楽しさを心から感じて活動を展開していくことが必要となる。

音楽表現活動を展開していく上で、保育者にはピアノ演奏や歌唱など様々な音楽技能が求められるが、その基礎として音楽的知識が備わっていないと十分に演奏技能を発揮していくことは困難である。しかし、本学に入学してくる学生はピアノなど楽器演奏の経験がない学生も多く、入学してから演奏技能の習得と並行して音楽的知識も学んでいかなければならない。入学後すぐにピアノ実技の科目がスタートするため、音楽的知識がないことで読譜に時間がかかり、ピアノなど楽器演奏の経験がない学生の多くは演奏技能の習得がスムーズに進まない現状がある。また、ピアノなど楽器演奏の経験がある学生においても、読譜が苦手な学生やリズムを聴きとったり表現する力が低いことにより、ピアノ演奏に苦勞している学生もみられる。ピアノ指導の際にきちんと楽譜を見て練習するように伝えても、インターネットを介して簡単に曲を検索して聴くことができるようになってきていることにより、新しい曲を演奏する時は読譜をして演奏するのではなく、音源を聴いて耳で覚えて弾いたり、ある程度曲の雰囲気を感じてから

取り組む学生も少なからずみられる。そうした取り組み方は、自分で読譜しているわけではないためリズムや音などが曖昧になってしまう可能性や、インターネットで配信されている音源が正しいものとは限らないため注意が必要である。また、学生の中には、楽譜に書いてあることを頭では理解できているが、それを演奏で表現できないという学生もいる。その多くは付点リズムの演奏を正確に表現することができず、教員が模範を弾いて示しても正しいリズムと自身が演奏したリズムの違いが分からない学生も見受けられる。単に読譜ができるようになるだけではなく、楽譜から読み取ったものを表現したり、様々な音やリズムなどを聴きとる力が備わっていなければいけない。そうした力を養うことで自身が音楽表現を楽しむことに繋がり、子どもたちにもその良さを伝えていくことができる。また、子どもの歌唱や自由な表現を聴きとることで、子どもの表現に寄り添い、他者と共有したり、更に表現の幅を広げられるような活動を展開していくことができると考える。

また、芥川 (1971)²⁾ は「リズムはあらゆる音楽の出発点であると同時に、あらゆる音楽を支配している。リズムは音楽を生み、リズムを喪失した音楽は死ぬ。この意味において、リズムは音楽の基礎であり、音楽の生命であり、音楽を超えた存在である。」²⁾ と述べており、エミール＝ジャック・ダルクローズやカール・オルフもリズムを重視した音楽教育理念を掲げていることで広く知られている。^{3) 4)}

本論文では、保育者を目指す学生が読譜力を身につけ、音楽表現の基礎となるリズム感を養うことができる指導法を検討していく。

II. ソルフェージュによる読譜力の向上

1. ソルフェージュ力の向上

保育者養成校での読譜の重要性については、これまでに多くの先行研究がなされている。その多くがソルフェージュによる読譜力の向上を取り上げており、長崎 (2015)⁵⁾ は、「限られた時間の中で、効果的に演奏表現技術を高めていくには、理想とする形を楽譜から素早く読み取り、完成体を常に思い描き、正しく訓練された耳で聴きながらの練習が必要である。そのためには、音楽性の基盤となるソルフェージュ能力が欠かせない。」⁵⁾ と述べている。

ソルフェージュとは、楽譜を正しく理解して歌う

ことや演奏すること、また、聴こえてきた音を正しく記譜するといった音楽の基礎能力を養っていくことである。保育者は、楽譜を正しく読み取ることで作曲家の意図に沿って楽曲を歌ったり演奏することができ、子どもたちに豊かな音楽を届けられる。また、保育者が聴く力をもつことにより、子どもの表現に寄り添い、周りと共有したり一緒に表現することで音楽活動を豊かに広げていき、音楽を介したコミュニケーションを図ることに繋がる。聴く力は、聴こえてきた音を正しく記譜できるようになることで、保育者間で楽譜のないオリジナルの曲等を共有する場合などに役立っていくと考えられる。そうした「(楽譜から)読み取る力」「聴く力」「書く力」「表現する力(歌う・演奏する)」をソルフェージュによって体系的に学んでいくことが大切であると考えられる。

2. ソルフェージュ教材の開発

ソルフェージュの教材はこれまで多く出版されているが、保育者養成校の限られた時間の中で要点を抑えて効率よく習得していくことができるよう、筆者は Step.1～Step.6 までのプリントを作成し、段階的に学ぶことができるようにした(資料1参照)。各ステップで出てくる新しい要素を、表1で示す。

ソルフェージュは、楽譜から瞬時に音の高さや長さを読み取り、それを表現していかなければならない。音楽的知識がまだ備わっていない学生にとっては、瞬時に読譜して理解することは非常に難しいため、読譜に対して苦手意識が生じることをないよう、次の5つの要素に細分化することにした。

- ①音読み、②リズム打ち、③視唱、
- ④両手でリズム打ち、⑤視唱&リズム打ち

これにより着実に読譜力を養っていくだけでなく、自分の苦手とする要素やレベルに合わせた内容を強化して取り組むことが可能になるため、効率良く読譜力を向上していくことができるようになるのではないかと考える。

表1. 各ステップで習得する要素

	音域		音価
	ト音記号	ヘ音記号	
Step.1			
Step.2			
Step.3			
Step.4			
Step.5			
Step.6			

①～⑤の特徴と指導上の注意点をまとめる。

①音読み

楽譜を見て即時的に音名を読めるようになることを目的とする。メトロノームを使用することで、拍感を意識して止まらないよう流れを大切にす。音の配列は順次進行からスタートし、徐々に跳躍するよう構成している。最初は、ゆっくりの速さ（40～50）でメトロノームを設定し徐々に速くしていく。あくまでも音名を即時的に理解することが目的のため、音程はつけずに読む。指導上の注意としては、何回も繰り返すことで暗記のように慣れてきたとしても、音符から目を離さないようにして読むことを留意させる。

②リズム打ち

リズム譜を用いて、正しく音価を理解し手拍子により表現することを目的とする。新しい音価を理解してから望めるよう、楽譜の前に表などを用いて説明している。複雑なリズムについては、「マーブル」や「ステーキ」など言葉に置き換えることで、リズムを感じやすくできるようにしている。最初は音価に注意して手拍子のみで行うが、慣れてきたら自分で拍を唱えながら手拍子でリズムを刻むようにする。指導上の注意としては、叩き始める前に拍を1小節分感じるようにすることで、一定のテンポでリズムを刻めるように留意させる。

③視唱

①と②の過程を経た上で、五線のメロディーを自分で読譜し、歌って表現することができることを目的とする。また、初見力をつけるために歌うだけでなくピアノで弾かせることも効果的と考えたため、指番号を記載した。内容は順次進行のものから作成することで、無理なく正しい音程で取り組みやすくしている。指導上の注意としては、歌う前に最初の音を出して音程を確認し、拍を1小節分感じてから歌うように留意させる。また、学生の状況によっては、歌を歌ってからピアノで弾かせるのではなく、最初にいきなりピアノを弾かせ、その後読譜をした上で再度弾かせることで、読譜の大切さを伝えることも有効的と考える。

④両手でリズム打ち

机などを利用して2声を同時に読譜しながら両手で異なるリズムを進行させていくことで、リズム感を養うだけでなくピアノ演奏の初見力の向上にも繋がることを目的とする。②と同様に慣れてきたら自分で拍を唱えながらリズムを刻むようにする。指導上の注意としては、叩き始める前に拍を1小節分感じるようにすることで、一定のテンポでリズムを刻むことができるようにする。また、最初は片手ずつ打つ練習からスタートするように留意させる。

⑤視唱&リズム打ち

②と③を融合させたものである。視唱とリズム打ちを同時進行することで、弾き歌いのように同時並行で異なる活動を行うことを目的とする。③と同様に初見力をつけるためにピアノで上段を右手・下段を左手1音で弾かせることも効果的と考える。指導上の注意としては、テンポを一定にするために拍を1小節分感じてから始めるようにする。また、最初は歌とリズム打ちをそれぞれ練習するように留意させる。

これら5つの要素をステップを重ねるごとに難易度をあげていくことで、読譜力の向上が期待できると考える。

Ⅲ. ボディパーカッションによるリズム指導

1. ボディパーカッションの背景と先行研究

ボディパーカッションは、福岡県久留米市の小学校教師である山田俊之が、昭和61年（1986年）に担任をしていたクラスの男子児童のことがきっかけで考案された。山田は、授業中注意散漫で集中力を持続できず同級生を困らせていた男子児童に対して、せめて音楽に関心をもってもらいたいと考えた。⁶⁾ また、当時勉強や運動が苦手な子どもに対し、どのようにして自分の存在価値を見つけることができるかを悩み、この男子児童にもクラスの一員として所属感や仲間意識が持てる良い方法はないか考えていた。⁷⁾ そのような子どもの自尊心感情を高める教材を模索していく中で、リズムを中心とした音楽的な身体表現活動を通して、音楽をより身近に感じてもらいたいという願いからボディパーカッションという音楽表現が誕生した。⁸⁾

山田は、ボディパーカッションの定義について次のように述べている。

具体的には、体全体（ボディ）を打楽器（パーカッション）にして手拍子、足踏み、膝や腹をたたいてリズムを奏でる音楽活動である。（中略）名称は児童が「体全体が太鼓になるね！」からヒントを得て、体を楽器にした音楽リズム身体表現を“ボディ・パーカッション”と名付けたものである。※ボディ（body 身体）パーカッション（percussion 打楽器の総称）⁶⁾

また、山田氏はボディパーカッションの効果について次の3つを挙げている。

第1は「音程がなくても簡単に音楽として演奏が楽しめる」ことです。それはリズムの楽しさや手拍子や足踏み、あるいはおなかやお尻など叩く場所を様々な組み合わせで叩くことで、その音色と視覚的要素が演奏に加わり、楽曲として成立します。

第2は「誰でも楽しめる音楽」です。ボディパーカッションの曲は、様々なリズム・アンサンブルを組み合わせる中で、パートによって簡単なパートや難しいパートが出てきます。それらを子どもたち（参加者）の技量や能力に合わせ、パートの難易度を分けることで誰もが参加しやすくなります。

第3は「うまくリズムが合わせられない子ども（参

加者）への配慮もできる」ことです。ボディパーカッションを打楽器の合奏（パーカッション・アンサンブル）として考えたとき、打つタイミングがずれる子どもたちがいた場合でも、それは間違えた人が少ない場合は装飾音符として考えられます。ハンディキャップがあり、うまくリズムが合わせられない子どもたち（参加者）への配慮も可能になります。以上のことからボディパーカッションは、「誰でも楽しめる音楽ジャンル」になるのではないのでしょうか。⁹⁾

また、先行研究では様々なボディパーカッションの実践例が報告がされている。佐藤（2008）¹⁰⁾ は、中学校の音楽の授業でボディパーカッションを教材として用い、ヴォイス・リズム（本稿ではボイスアンサンブルと表記）や手拍子、ひざ打ち、足踏みの作品など多数取り上げている。学生にボイスアンサンブルの小品を作らせた事例では、パートごとにタイトルに沿った言葉を、言葉のもつリズムを活かしてアンサンブルを完成させていた。何名かは言葉のリズムに加えて、イントネーションに従って一線譜や五線譜上に音の高低さを記譜している作品もみられた。また、佐藤はボディパーカッションには音楽表現に対する興味・関心をもたせるだけでなく、創造性・即興性・積極性・協調性・社会性までを身につけることができると見出している。身体を使ったリズム表現は、各種打楽器への導入を容易にし、歌唱教材や鑑賞教材などと併用するなど、指導者のアイディア次第で、応用範囲が広がっていくと考察している。

岡崎（2017）¹¹⁾ は、保育者養成校でグループ研究の題材としてボディパーカッションを用い、各グループでの練習過程や成果から、学生に対し指導者側の視点にたって子どもたちに指導する際に大切なことや子どもの何が育まれるかを検討させた。その結果、リズムの覚え方を工夫することや、ボディパーカッションによって集中力、協調性、責任感が育つことを学生から引き出している。そして、未経験の学生がほとんどであったにも関わらず、グループ練習に意欲的に取り組み、自然と身体でリズムを暗譜し、フォーメーションを工夫することでグループ研究の成果に繋がったとしている。

様々な形態のボディパーカッションに取り組むことにより、表現することへの積極性、言葉とリズムの関連性、創造性が効果的に育まれていると見受けられる。

2. ボディパーカッションの展開

保育者を目指す学生は、ソルフェージュを通して様々なリズムパターンを理解し習得することによって読譜力を向上させるだけでなく、それを自由に表現するための素材として活用していくことが求められる。諸井ら(1966)¹²⁾は、「リズム感とは、『聞く』『うたう』『弾く』ことの外に、更に『おどる』『リズム合奏』を通して養われます。(中略)リズム感とは、単に耳だけでなく、身体を通して感受されるという特徴をもっていますので、音楽をきいて歩いたり、おどったりすることや、リズム楽器を打つことなどは、リズムを身体で感じ、身体で表現していることで、リズム感発達の上からも、大いに奨励したいところです。」¹²⁾と述べている。そのため、ソルフェージュによって養われた力を活かし、2年次後期の「器楽アンサンブル」の授業の中で、身体でリズムを感じ表現するボディパーカッションを導入することを考えた。器楽アンサンブルでは、器楽の演奏という面から音楽の楽しさを追求し、子どもたちに豊かな音楽表現活動ができる環境を創り上げることで保育者の育成を目的としている。楽器を用いる前に、身体を使ってリズムに親しみ、表現を楽しむことができるよう最初の2コマを使いボイスパーカッション、ボディパーカッションに取り組む。ここでは、II章で述べたような読譜によるリズム活動ではなく、多様なリズムを自由に表現していくことができるような活動を目的としている。授業で取り入れているボディパーカッションから3つ例として取り上げる。

1) 『みなさんリズム』¹³⁾ (リズム遊び)

以下のようにAの呼びかけから、問答形式でリズム、動作を模倣させる。

- ・A「みーなーさん」
- ・皆「なんですか」
- ・A「こんなことこんなことができますか？」
(手やひざ、お腹、おしりなど好きなところ
リズム打ち)
- ・皆「こんなことこんなことができますよ」
(Aのリズムを模倣)

学生1人をA役として実践する。A役がリズムにのって問いかけることで、皆が模倣により自然と拍の中で言葉を発したり、リズムを打てるように促すことができる。繰り返し行う際には、間を空けてし

まうとリズムの流れが途切れてしまうため、A役は皆の様子を見ながら様々なリズムを展開していく必要がある。そのためには、多様なリズムのレパートリーを備えておくだけでなく、即興的に次のリズムを引き出していかなければならない。また、問答形式で行う活動により、Aからの発信を集中して聞くだけでなく、身体を使って表現しながら他者とのコミュニケーションを図ることに繋がる。指導の際には、学生の自由で主体的な表現を大切にするために教員は極力見守る体制でいる。ソルフェージュでは、手拍子を使ってリズムを打ってきたが、A役の学生が、膝やおしり、ジャンプ、足踏みなどでリズムを打ってみるよう助言することで、学生自身に手拍子以外の様々な音やリズムを用いた動きの発見を体験させる。また、この活動は音楽が苦手な学生でも自由に楽しみながらリズムを打つことができ、子どもとも簡単に活動していくことが可能である。

2) 『ワン・ニャー・ブー・コケッコー』¹⁴⁾

(ボイスパーカッション)

わん吉(いぬ)、ニャン子(ねこ)、ぴー太(ぶた)、クックル(にわとり)の4パートに分かれて実践する。各パートとも鳴き声のリズムを活かし曲が構成されている。わん吉から順にニャン子、ぴー太、クックルと入り、言葉の重なりによって音量が増して盛り上がりを感じることができる。各パート2小節のリズムを繰り返していくため覚えやすい構成になっている。指導の際には、まず全員で各パートのリズムを一緒に確認させる。ここでは、楽譜の上に物語が書いてあるため、物語を読んで自分なりのイメージで再度表現させることで、強弱や声のトーンなどに変化が生まれ、同じ鳴き声やリズムでも表現が豊かになることを体験でき、お互いの表現をよく聴きながら活動していくことができる。

3) 『クラップ&ストンプ』⁹⁾ (ボディパーカッション)

4パートに分かれたボディパーカッションの作品である。各パートで2小節のリズムが繰り返され、段々重なっていく。それぞれ違うリズムを打っていたものが、途中で4パートが一緒のリズムを同時に打つことでより一体感を得ることができる。楽譜には、身体はどこを使ってリズムを打つか指示されている。途中で1パートずつ2小節の即興表現をする箇所があるが、事前に『みなさんリズム』の活動を体験することで、身体を使った自由に生き生きとし

たりリズム表現の展開をしていくことができると考える。指導の際には、楽譜からリズムを読み取ることができない学生がいた場合は、Ⅱ章で提示したソルフェージュプリントを活用し、「マーブル」や「ステッキ」などリズムを言葉に置き換えるようにする。また、それぞれが自由な速さにならないよう、全員で拍を唱えながら各パートのリズムを確認する等に留意する必要がある。

Ⅳ. おわりに

本研究では、保育者を目指す学生が読譜力を身につけ、音楽表現の基礎となるリズム感を養うことができる指導法の検討を行った。

保育者は子どもが自由に表現を楽しめる環境を構成するために、子どものありのままの表現を受け止め共感しながらさらに創造を膨らませていけるよう活動を広げていくことが求められる。活動していく際に保育者はピアノや歌唱などの演奏技能が必要となるが、どちらの演奏技能にも根本として読譜力が備わっていなければならない。本稿では、読譜力の向上を図るために、独自のソルフェージュ教材の作成を行った。音楽的要素を着実に習得することができるよう、Step.1～Step.6までを段階的に構成し、各ステップの内容を①音読み、②リズム打ち、③視唱、④両手でリズム打ち、⑤視唱&リズム打ちの5つに細分化して取り組むことができるようにした。これにより学生は自分の苦手とする内容やレベルに合わせて内容を強化して取り組むことが可能になるため、効率良く読譜力を向上していくことができるのではないかと考える。そして読譜によって養われたリズム感は、身体を使って動きながら感じていくことが重要であり、保育者として音楽表現活動を行う上で活用していくことができなければ読譜ができていても意味をなさない。本学では、ボディパーカッションに取り組むことにより、学生が身につけた読譜力・リズム感を活かして感じたことを、自由に身体を使って表現することができるように指導を行う。ボディパーカッションのような音高のないリズムによって構成される活動は、音楽に苦手意識をもっている学生にとっても音楽を楽しみながら自己表現ができると考える。また、他者とリズムを介してコミュニケーション力を育むことで、一体となって達成感を得ることができ、豊かな感性や創造性、表現することの

楽しさや意欲を育むだけでなく、他者との信頼関係や、協調性、責任感を養うことにも繋がると考える。

今後は、授業での実践を重ねていながら、本研究の指導に関する考察や課題と向き合い研究を進めていきたい。

参考文献・引用文献

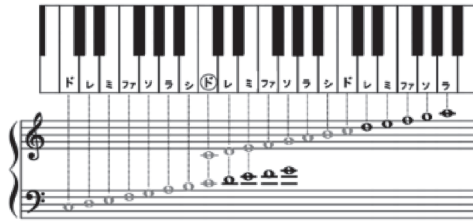
- 1) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』, p.223. 株式会社フレーベル館, 2017.
- 2) 芥川 也寸志：『音楽の基礎』, p.88. 岩波書店, 1971
- 3) 杉山真佑美：エミール・ジャック＝ダルクローズのリトミックに関する一考察ーリズム運動と人間教育の関係性に着目してー. 学習院大学ドイツ文学会研究論集, 第22号, 55-72. 2018
- 4) 村山淳子：C. オルフの音楽教育理念に基づく幼児のリズム指導についてー「音楽リズム」における実践のためにー. 長野県短期大学, 第40巻, 113-122. 1985
- 5) 長崎 結美：『保育者養成課程におけるソルフェージュ指導ーフォルマシオン・ミュージカルの視点からー』, p.37. 帯广大谷短期大学紀要 (52). 2015
- 6) 山田 俊之：子どもたちが楽しんで音楽にかかわり、創造的に表現するボディ・パーカッションを取り入れた音楽教育の歩み. 日本音楽教育学会 音楽教育実践ジャーナル1 (1), 28-43. 2003
- 7) 山田 俊之著：『保育園・幼稚園 de ボディパーカッション&リズム遊びーみんなで楽しくうたって動いてリズム感アップー』, 明治図書出版株式会社, 2018
- 8) 山田 俊之著：『ボディパーカッション入門ー体を使った楽しいリズム表現』, 音楽之友社, 2000
- 9) 山田 俊之著：『楽しいボディパーカッション③ーリズムで発表会』, 音楽之友社, 2004
- 10) 佐藤 須美子：中学校音楽科における「ボディ・パーカッション」の意義とその活用, 広島文化短期大学紀要 41, 77-90. 2008
- 11) 岡崎 裕美：保育者養成における身体表現・音楽表現の学習の必要性ーグループ研究を通しての学習成果ー, 千葉敬愛短期大学紀要 (39), 373-381. 2017
- 12) 諸井 三郎、酒田 富治共著：『保育のための音楽教育』, p.167. 恒星社厚生閣, 1966
- 13) 山田 俊之著：『楽しいボディパーカッション①ーリズムで遊ぼう』, 株式会社音楽之友社, 2001
- 14) 山田 俊之著：『楽しいボディパーカッション②ー山ちゃんのリズムスクール』, 音楽之友社, 2002

(資料 1.)

Step. 3

《1. 音読み》

メトロノームの速さ		
ゆっくり 40~50	ふつう 60~72	はやく 80~100



1.

2.

3.

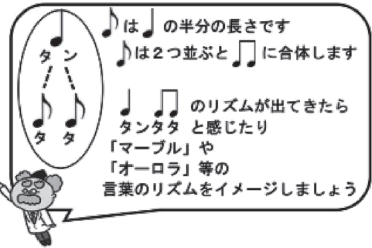
4.

5.

6.

《2. リズムうち》

①	②	4分音符	1 2 3 4	4分休符
		♪ 8分音符	1 と 2 と 3 と 4 と	♪ 8分休符



1.

2.

3.

4.

《3. 視唱》

1. 

2. 

3. 

《4. 両手でリズムうち》

1. 

2. 

3. 

《5. 視唱 & リズムうち》

1. 

2. 

About the Teaching Method to Cultivate a Sense of Rhythm in the Training of Childcare Workers

Asaka Yamaji

<Abstract>

In this paper, I examined teaching methods to cultivate a sense of rhythm for students who aim to become childcare workers.

Childcare workers are required to have skills such as playing the piano and singing to support children's musical expression activities. However, due to a lack of musical knowledge that is the basis of performances, particularly among beginner students, it takes time to learn to read music and acquire skills. Therefore, we created our own teaching materials for the purpose of improving music reading ability, organizing the materials into six steps so that we could subdivide the contents of each step allowing students to learn the musical elements. This makes it possible for students to work according to their level and the elements that they are not good at, allowing them to efficiently improve their music reading ability. In addition, we carry out body percussion activities to promote the development of a sense of rhythm. Activities centered on rhythms without pitches can be enjoyed by students who are not good at music. Communication with others through rhythm is thought to lead not only to foster a rich sensibility and enjoyment of expression, but also to foster various abilities such as cooperation and a sense of responsibility.

Keywords: rhythm, solfege, body percussion, musical expression, childcare worker training

